

令和6年度研究発表会のご案内



研究主題

学びをたのしみ自律共創する子ども

- 日 時 令和7年2月14日（金）8：50～15：50
 会 場 熊本大学教育学部附属小学校
 内 容 対面による各教科等の授業公開・分科会・講演

講 師

香川大学 准教授 岡田 涼 先生

著書

- 『やる気をひきだす教師：学習動機づけの心理学』（金子書房）
 『自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術』（北大路書房）
 『教師として考えつづけるための教育心理学』（ナカニシヤ出版）
 『子どもと大人の主体的・自律的な学びを支える実践』（福村出版）



附属小学校ホームページのご紹介

新しいコンテンツ
続々登場!!

●授業研究最前線

臨場感あふれる各教科の取り組みを随時更新します。



●実践・研究ブログ

校内で行われた最新の授業実践が掲載されます。

<https://elem.educ.kumamoto-u.ac.jp>

熊大附属小 検索

附属小学校SNS

本校の実践を SNS で発信しています。共に熊本の教育を充実・発展させていきませんか？

熊大附小公式 Facebook

熊大附小 LINE 公式アカウント



附属小 研究だより

研究主題

学びをたのしみ自律共創する子ども



Contents

令和6年度前期の実践紹介
 研究発表会のご案内

校長挨拶



「清らなる 瞳つどいて
ひたすらに 学ぶ喜び…」

本校の校歌は、この歌詞で始まります。この歌詞の学びを喜ぶ子どもの姿とはどんな子どもの姿なのでしょうか。思うに、学ぶことそのものに喜びを見いだし、自ら学びをたのしもうとする純粋な子どもの姿が浮かび上がります。しかも、ここでの喜びは、周りから与えられたものではなく、友との主体的な学びを通して子ども自身の内面から自然と醸し出されてくるものなのでしょう。

今年度を含め4年間にわたり本校で追究してきた「学びをたのしみ自律共創する子ども」の姿とは、校歌の歌詞の子どもの姿に重なって見えます。目指す子どもの姿は、昔も今も本質的には同じであり、このような子どもの姿を目指すために、私たちは様々なアプローチを模索して取り組んできたと言えるでしょう。本校では、これまでの研究

校長 塩村 勝典

研究提言

今問い合わせ！私たち教師の役割とは？

◆夏の実践研修会のお礼

今年度も、本校の夏の実践研修会では、夏休み期間中に子どもたちが登校し、授業を公開しました。県内外から対面で約200名の方、オンラインで約100名の方にご参加いただきました。多数のご参加ありがとうございました。

「夏休みに子どもの姿から学ぶことができてよかった」「授業づくりの新たな視点を学ぶことができた」「固定概念が覆されたたのしい授業だった」などの声をいただき、私たちの研究の一端をお見せすることができたのではないかと思っております。「子どもの姿から学ぶ」という教師にとって大切な時間を、参加の方々と語り合うことができ、とても有意義なものとなりました。

私たちは今年度、教師の役割を問い合わせたいという思いをもって研究を進めています。子どもを中心にして授業を考えている今だからこそ、子どもが学びをたのしむために私たちには何ができるのかを探っていきたいのです。本誌右側には、今年度本校で行った実践を紹介しております。

◆事前に学習の環境をデザインするという役割

夏の実践研修会の公開授業Ⅰでは、国語科木下教諭が詩を豊かに読み深めるために「なってみる」という活動を中心据えた活動を仕組んだ授業を提案しました。子どもたちは、登場人物になってみる過程で文章中の動詞に立ち止まり、実際に動いて場面の様子を考える姿がありました。さらに、動いている友達にインタビューをする活動も組み込むことで、登場人物の心情により迫ることができました。

また、右に記載してある6年理科の実践では柿原教諭が「単純化モビール」を使うことで、支点からの距離と重さの関係を見いだしやすくなるように活動をデザインしました。単純化されたモビールを基に実験することで、規則性を見いだしやすくするとともに、子どもたちの対話の土台を整えることができました。それにより、子どもたちは、実験結果を基に科学的な考察へと向かっていきました。



どちらの授業にも、子どもたちが「学びをたのしむ」ために、学習活動をデザインするという教師の役割が見えてくるかと思います。これらは教師が授業をする前の準備として行われることが多く、学習内容や子どもの実態などと関連を図りながら構想していきます。

◆授業中に子どもを評価しフィードバックするという役割

しかし、教師の役割は上述した事前の準備だけではないことは明白です。教師がどんなに優れた活動を構想したとしても、子どもに任せるだけでは深い学びへと誘っていくのは難しいでしょう。やはり、これまでも大切にされてきた教師の関わりは欠かすことはできません。これからも授業の中で夢中になって活動している子どもの姿を適切に見取り、子ども一人一人に応じた指導をしていくといった、指導と評価を一体とした教師の関わりが重要だと考えています。

右に記載してある6年体育科の実践では、西教諭が様々なフィードバックを行っています。実践の内容から「感情の起伏を図で表すように促した」、「教師から動きの変化に着目した声掛けを行った」という教師の評価を基にしたフィードバックがあることが分かります。これらの関わりによって、子どもたちは自分たちの動きを試行錯誤するための視点を見付け、自分たちで学びを促進していくことができたと考えられます。

今まで「教師の役割を問い合わせ」という課題意識をもって、実践を積み重ねてきております。これまで大切にされてきていたことに加えて、実践をする中で新たに見えてきたことを基に、今求められている教師の役割について更に研究を進めてまいりたいと思います。これらの成果を令和7年2月14日の本校の研究発表会でご紹介していきます。皆様のご参加をお待ちしております。

研究部長 是住 直人

実践紹介

第6学年 / 体育 / 表現運動（表現）

わたしたちの附属小を伝えよう

～考える子・強い子・明るい子～

体育科 西 沙織



【教材について】どんな動きも正解となりうる表現運動領域。子どもたちが関わり、試行錯誤しながらひとまとまりの動きを創り出していくには単元をどうデザインすればいいか。そんな思いから授業をつくりました。今回は、本校の校訓「考える子・強い子・明るい子」が題材です。一見、抽象的ですが、6年間の経験を基に考えることで、「こんなことを表したい！よりよきたい！」という思いが表出し、関わりが生まれやすいのではと考えました。

【学びの様子】チームごとに3つの校訓から1つを選び、テーマ（伝えたいこと）を設定して実際に動いていました。しかし、自分たちのテーマが伝わらずに困っている姿がありました。そこで、感情の起伏を図で表すよう促し、実際の動きと関連付けることで動きに緩急を生み出していました。

かりなさんのチームは、地面にしゃがみ込むことで困る場面を表現した後、



感情の起伏の図

第6学年 / 理科 / てこのはたらき

つくろう！マイモビールキット

理科 柿原 智明



【教材について】「このようなものをつくりたい」という目的をもってものづくりに取り組む中で、そこに存在する自然事象のきまりを、子どもたちが発見してほしいという願いをもち、本単元を構想しました。本単元では、単元初めから子どもたち一人一人がオリジナルのモビールをつくり、そのモビールのつくり方や、つり合う仕組みをまとめた「説明書」を単元を通して更新していました。



【学びの様子】単元中盤、オリジナルのモビールをつくることはできても、目の前のモビールがつり合っている理由を説明することが難しい様子がありました。それは、子どもたちがつくったモビールのほとんどは、おもりの個数やつるす位置が左右非対称で、「条件が左右対称だとつりあう」という最初に発見したきまりだけでは、

アイデアがひらめいた場面にどう繋ぐといいのかという事を試行錯誤していました。一人の子が頭を上げ、ひらめいたポーズをとった際、教師から「頭が低いところから高いところになるから変わった感じがよく伝わる」と動きの変化に着目した声かけを行いました。すると「膝立ちより、一気に立った方がひらめいた感じが伝わるかも」と場面の変化を表す動きを高さの差で工夫していく姿が生まれました。また、他チームとの相互鑑賞の際には以下のようなやりとりがありました。

かりな：ごちゃごちゃのところ、もうちょっと大きづけてもいいかなって。

りくと：どういうこと？

かりな：頭の位置が同じだから、高さの大小をつけて…（一緒にしてみる）

ひまり：それなら、でこぼこがわかる感じがいいね。

かりなさんは高さという視点があったからこそ、他チームの鑑賞にも生かしていくことができました。このように、相互鑑賞はかりなさんのチームにとっては動きを変化させる「高さ」という視点を自覚する場となり、他のチームには新しい視点を獲得する場となりました。この相互鑑賞をきっかけに、さらに自分たちで工夫をしていく姿が生まれました。

説明書がつくれなかったからです。

そこで、モビールから一部を取り出した“単純化モビール”を用いて、ものがつり合う時の、支点からの距離とおもりの重さの関係を見いだす活動を設定しました。活動の後、各班の実験結果を表にまとめ、全体で共有する場を設定すると、以下の対話を生まれました。

ゆきこ：きまりは、“かけ算”になっているみたいですね。

こうた：そっか、もし支点からの距離とおもりの重さの“足し算”だったら、左側のうでがおもり0個でもつり合うところがでてくるのか。やっぱり“かけ算”的なきまりって言えるんじゃないですか。

たいち：ああ、“かけ算”だったら距離がどこまで大きくなても、きまりが成り立つね。

全体の場で、表の数値を基にどのようなきまりがありそうかを検討する場を設定したこと、得られた実験結果の数値から得られたきまりを基に、もしこうだったらと仮定しながら、多面的により妥当な考えをつくり上げることにつながりました。